

すべき所にあらざるべし。斯世の事は、變の如く、一舉して、大に得べきものにあらず。壹歩々々、微を積み、理を盡して、始めて成るものなれば、此の點に於ての訓育は、大に従來の、家庭の訓育に缺くる所に非ざるか。人として世にある、苟も、一毫たりとも、己か存する爲に、世に益することあらんか、以て人たるに恥ぢざるべし。豊公の經綸も、一農夫の鋤犁も、其の天稟の性を盡すに於て、何の差かある。要は、各相應する事に致すに在り。之れ、エドワードを傳ふる所以なり。

(完)

Sprich, was wahr ist, trenk, was klar ist, ist,  
was gar ist.

語るに眞實を以てし  
飲むに清澄なるものを以てし  
食ふに全きものを以てせよ

# 春風春水

雨  
峰  
生



幽けき天の眞井より  
さるび出でたる谷清水  
野こえ畑こえ目もはるに  
河瀬靜かに馳りゆく  
その河沿の橋のもと  
佇むわれに語るなに  
人家稀れなる村里を  
離るを厭ふ情あるか

雪を浮べし花筏いかだ  
岸より岸に定めなく  
水の面を縫うて流れくる  
無言の春や情なきか

身の運命を知りにける  
花や怨ずる色もなく  
ちりたるまゝに流れゆく  
君天上の使かや

かの銀鞍に鞭をあげ  
うたげに酔うて月をあび  
微風に吟歩かるく占め  
春の夕にあこがるゝ

塵の巷の詩人うたびとは  
かの紺青の曙あけの空  
色に狂うて春を追ふ  
昏夢は永く醒めやらで

短き命運さたまななき時間とき  
何れはなれぬもつれ糸  
しばし宿りを野に山に  
契りしえにし唧つかや

若し揺りかごに夢結び  
わかき昔しのありし日を  
尙も追はんとつとむるは  
壯者の今を知らぬよな

あゝ萬花開きて天地の  
無邊の萬象すうざう生れ出で  
萬花は落ちて春閉づも  
こゝに理想の影ありな

見よ薰風ぼんかぜの南より  
人の胸より胸にしみ  
若葉の夏と變りなば  
乾坤やがてつよく活く

春シーズンの化城かや  
紅紫にそみし花衣  
ぬきかへゆくぞとこしへの  
光りはこゝにやとる見よ

### 新鉢詩學び卒へし友の許に

平野ゆき子

無情が有情の体なれば 有情は無常の姿なり  
何か恨みん世の中は うつろひ易きものなるを  
さはさり乍ら君と我 月かぼるなる上野山  
花散りかゝる隅田川 行きみし事もふりつるに

春糸遊のもゆる野に  
すみれつみつゝうたひつゝ  
雲雀の聲の地にかちて  
西の山もとかすむ時  
ともに柴生にやすらひし  
追懷こそは残りたれ

秋晚鐘を遠く聞き

千入の紅葉かざしつゝ  
見渡すかぎり稻の穂の  
黄金の波なす田の面より  
飛び立つ雀眺めてし  
思ひいでこそこのりたれ

ひつみし友の業成りて 嬉しき今日の其翌に  
辛き別離の潜みしよ 君行きますか故郷に  
雪や螢と學び舍に つみし光を身におひて  
君よゆきませ故郷に 飾る錦を家づとに

### みやげの劍

つねを

戦さにいつた 兄さんが  
敵の大將 うしろ手に  
かたく縛つて つよさうに  
坊がたのんだ みやげよと  
一ばん好きな 劍持つて  
ゆふべ歸つた 夢を見た